☙ 第2課 ❧

田中正造

日本語総合教程第五冊

今回の主な内容

★新しい言葉
★言葉の学習
★本文
★類語の学習
★練習
★文学・語学の豆知識
★読み物

新しい言葉

1、がっしり 3

（副）体格や物の構造・組み合わせなどが力強く安定しているさま。たくましいさま。

▲がっしりした体つき・建物

▲がっしり（と）組み合わされた格子

2、乱れる3

①整っていたものがばらばらになる。乱雑になる。

▲風で髪が乱れる。 ▲列が乱れる

②通常の状態でなくなる。

▲呼吸が乱れて苦しそうだ。 ▲脈も乱れる。

③秩序がくずれる。混乱する。

▲天下が乱れる。 ▲風紀が乱れる。

▲知らせを聞いた彼女の心は千々に乱れだ。

3、立ち枯れる04

草木が立ったままで枯れる。

▲立ち枯れた街路樹

4、直ちに1

（副）

①時間を置かないで物事を行うさま。時を移さず。すぐ。

▲直ちに出発せよ　▲過ちを直ちに改める

②間に他の物をはさまないさま。直接に。じかに。

▲失敗は直ちに死を意味する

5、償う3

①埋め合わせをする。特に、弁償する。

▲友達の借金を償う。　▲割ったガラスの代金を償う。

②罪やあやまちの埋め合わせをする。

▲刑に服して罪を償う。

6、捧げる0

①両手で、物を目より高くして持つ。

▲賞状・優勝杯を捧げるように持つ。

②神仏や高貴な人などに献上する。さしあげる。供える。

▲仏様に花を捧げる。

▲清明節になって人民英雄記念碑に花輪を捧げる。

③敬愛する人に、自分の著作などをさしだす。献呈する。

▲この本を亡き母に捧げる。

④(「身」「一生」「心」などを目的語として)自分のことをかえりみないで、ひたすら相手に尽くす。

▲愛する人に身も心も捧げる。

▲研究に一生を捧げた。

▲彼はその生涯を芸術に捧げた。

7、買い取る3

買って自分のものとする。

▲借地を買い取る。

▲いままで借りていた家を買い取る。

8、滓1

①液体の底にたまる沈殿物。液体をこしたあとに残る不純物。

▲茶の滓　▲滓を除く。

②ねうちのないもの。ひどくつまらないもの。

▲バーゲン-セールで滓をつかまされた。

▲人間の滓

9、染み出る(滲み出る)3

中の液汁が、それをおおう物を通り抜けて表面に出る。

▲包み紙を通して油が染み出る。

10、青白い4

①青みがかって白い。▲青白い月の光

②血の気のない顔色をしている。

▲彼は病気で青白い顔をしている。

[青白きインテリ]

　実行力に欠ける知識人をあざけっていう語。白面书生

11、濁る2

①(きれいでなくなる)浑浊，不透明

▲水道の水が濁る。

▲空気が濁る。 ▲濁った色。

②(特に人の心や世の中の状態がけがれる)起邪念，生烦恼(気持ちや精神が正しくない。)

▲心が濁る。 ▲濁った心をもっている。

▲濁った世の中に行きてゆくのは難しい。

③(はっきりしない)不清晰

▲ぼんやりと濁った頭で考える。

④かなの右の上に点を二つつける。またはその発音する。

▲「か」が濁ると「が」になる。

▲濁りを打つ。

▲うでにはめる「とけい」は「うでどけい」と濁って発音してください。

2、…かたわら

3、…つくす

4、…に終わる

5、目も当てられぬ

6、胸を撫で下ろす

7、ひた(動詞連用形)に(同一動詞)

8、…とする

9、…あまり

10、一つ…ない　雲ひとつない

精読　　1　　頑丈・逞しい

一八九一年（明治二十四年）の十二月二十五日、日本に国会が開設されて第二回目の議会でのことである。年齢は五十歳ぐらい、がっしりとした体つきの男が演壇に立ち、政府への質問演説に熱弁をふるっていた。満場、きちんと洋服を着た議員ばかりなのに、その男の身に着ているのは、粗末な木綿の着物と袴。しかも、髪は乱だれ放題で、気にかける様子は全くない。

ある物事に心から離れず、心配である。

彼は、かたわらの袋から、死んだ魚や立ち枯れた稲など、不気味な物を取り出しては、「足尾銅山の流す鉱毒のため、渡良瀬川の流域では、これ、このとおり魚は死に、作物は枯れてしまう。政府は、直ちに銅山に命じて鉱石を掘ることをやめさせ、銅山の経営者は、農民たちの被害を償うべきであります。」と叫ぶのだっだ。

正体が知れず、気味の悪いこと。例：不気味に静まり返っている。

立ち枯れ病。農作物の根や茎の地際部が侵され、立ったまま急速に枯死する病気。

この男の名は田中正造。正義と人道のために一身を捧げつくして、後に、明治の義人と呼ばれるようになった人物である。

自分の持っているものをすべて相手に差し出す。▲身も心も捧げる。▲研究に捧げる。

関東地方の地図を開くと、栃木県の西北部、有名な中禅寺湖の近くに、足尾という銅山の在るのが分かる。江戸時代にも鉱石が掘り出されていたが、一八七七年（明治十年）にある実業家がこの銅山を買い取ってからは、鉱夫のに数は千人、年間四千百トン余りもの銅を産出するよになり、それとともに鉱毒の害があらわになってきたのである。

顕・露：内部に潜むものが表面に現れている状態。

外ににじんで出てくる。

かす

　雨が降ると、捨てた鉱石の滓から毒が染み出て、近くを流れる渡良瀬川は青白く濁り、何万匹も魚が白い腹を見せて浮き上がる。その近くの畑に植えた物作は、根から腐って枯れてしまう。そして、一八八七年（明治二十年）ごろからは、渡良瀬川、沿岸一帯の村々の田畑が不作となり、農民たちあは貧苦の底に沈むようになったのだった。

穀物などの出来が悪い。
凶作。

一八四一年（天保十二年）十一月三日、今の栃木県佐野市に生まれた田中正造は、元の名を兼三郎といったが二十八歳のとき、

「人間にとって一番大切なのは、正しく生きることだ。人生五十年とすれば、私は、もうその半ばを過ぎている。せめてこれから先は、正義を貫いて生きたいものだ。」と考えて、自ら正造と改名した。

最小限の願望。不満足ながら、少なくとも。

終わりまで成し遂げる

そして、昼夜学校へ通えない青少年のために夜学会を開いたり、栃木新聞という新聞を出して、民衆の権利を主張し、郷土の人々の役に立つ記事を載せたりした。しかし、正造を正しいと信じることは、なかなか世の中へ広まっていかない。そこで、正造は一八八0年（明治三十年）には栃木県には会議員に、一八九0年（明治二十三年）には衆議院議員になって、自分の考えを実際の政治の上に生かそうとしていたのだった。

そういう正造だから、今、足尾銅山の鉱毒に苦しむ農民たちを見て、黙っていることはできない。彼は、農民の代表として

「山から銅を採って、日本の国を豊かにするのは、確かに大切なことでありましょう。だが、そのために多くの農民を犠牲にすることは、絶対に許されませぬ。」と訴え、鉱毒問題と真剣に取り組み始めたのである。

相手となって争う。
互いに組み合う。

2

正造が、国会で火のような弁舌をふるって忠告したにもかかわず、明治政府は「群馬、栃木の両県の田畑で作物が枯れたりしているのは事実だが、足尾銅山の鉱毒が原因かどうかは分からない。」といって、問題を取り上げようとしなかった。

申請したこと
を受理する。

しかし、正造は、確かな証拠を持っていたのである。というのは、すでに前の年、正造と農民たちは、農科大学（今の東京大学学部）の古在由直助教授に頼んで、足尾銅山の鉱石の滓と被害地の土・水の調査をしてもらっていた。その結果が、正造たちの予期していたとおりだったのである。足尾銅山から流れ出る水は、銅・鉄分および硫酸をおびただしく含んでおり、動植物が死んだり枯れたりしるのはそのせいであるというのだ。

はなはだ多い。

　そこで正造は、翌年五月に開かれた第三議会で再び演壇に立ち、動かぬ証拠をしめして言葉鋭く政府に迫った。科学的な調査の結果を見せられては、政府も足尾銅山の鉱毒を認めないわけにはいかない。政府は、政府を経営する会社に注意を促し、会社はようやく粉鉱採集器というものを備え付けて、鉱石の細かな滓が散らばらないように処置したのである。

父様（ととさま）の転。父の尊敬語。

「もう大丈夫。これも田中のとっさまのおかげです。」農民たちはそう言って喜び、稲も麦も豊かに実ってくれるものと期待したのであった。

だが、農民たちのその期待は失望に終った。粉鉱採集器もさっぱり効き目がなく、二年たっても、三年たっても、渡良瀬川の魚の死ぬのはやまないし、作物もはかばかしくは実らない。いや、それどころか、鉱毒の害はますますひどくなっていくのだ。

捗捗しい：望ましい方向へ進む。順調に進む。

そして、鉱山拡大のために山の木を切り過ぎたことも祟って、一八九六年の秋、大雨のために渡良瀬川の堤防が切れると、鉱毒で汚れた水は、たちたち沿岸八十八の村々を襲い、目も立てられぬ有様となったのである。

正造は、またしても議会の演壇に立ち、「足尾銅山の採鉱を停止すること、それ以外に村々を救う道はありませぬ。」と叫ぶのだった。

またも重ねて。

　正造の言うとおり採鉱をやめれば、確かに鉱害はなくなるだろう。しかし、銅の産出量が少なくなれば、その分だけ日本の国力も弱くなる。そこで、政府は政府側に命令して、二十か所に鉱毒沈殿池と鉱毒濾過池を造らせたのである。銅山側は「これで、二度と鉱害は起こりません。」と名言し、農民たちもようやく胸を撫で下ろした。

ところが、一八九八年の九月のこと、降りしきる雨に、沈殿池と濾過池の堤防は脆くも崩れた。そして、たまりにたまっていた鉱毒は、いちどきに渡良瀬川へ流れ込み、またたく間に、沿岸の田畑数万町歩を覆ってしまったのである。これでは。もう半永久的に作物は実らないだろう。

壊れやすい。
砕けやすい。

ほとんど永
久に近い。

しきりに振る。
盛んに降る。

耐え難いほどに思う。　　しっかりと身づくろいをする。

思い余った農民たちは九月二十六日の夜明け前、蓑笠と新しいわらじに身を固め、渡良瀬川中流の渡瀬村にある雲龍寺の境内に集まった。その数はおよそ一万人。彼らは、生きるために、大挙して東京へ押し出し、足尾銅山の経営者と政府とに直接かけ合おうというのである。

大勢こぞって向かう。大挙して押しかける。　　交渉する。

やがて、東の空が白むころ、農民たちの大群は南へ南へと動き始めた。これに気付いた警察は、農民たちを東京へ入れまいとして、あちこちの橋を壊して回る。そこで、農民たちが船で川を渡ろうとすると、警官はサーベルを引きぬいて、あくまでも農民たちを追い返そうとし、多くの犠牲者が出たのだった

夜が明けて明るくなる。

　このとき正造は東京におり、風邪を引いて宿屋の一室で寝ていたが、知らせを聞くとはね起きた。

　そして人力車をひた走りに走らせ。埼玉県境の淵江村で農民たちに行き会うと、

休まずに走る。

　「皆様、待ってくだされ。この正造の言うことを聞いてくだされ。」と、両手を広げて押し止めた。それから、声を振り絞って、

飛び起きる。跳ねるように勢いよく起きる。

進んで行って出会う。

しぼり出すように、声・力・知恵などを精一杯出す。

「この田中正造、皆様の煮え繰り返る胸の内、ようく知っております。しかしながら、皆様、これだけの人数で帝都へ押しかけるのは穏やかでありませぬし、犠牲者をこれ以上増やしてもなりませぬ。この日本は、法治国家であります。われわれの希望や要求は、あくまでも議会を通して、平和のうちに実現させなくてはなりませぬ。」

非常に腹が立つ。

正造の真心からの言葉を聞くと、農民たちはみな、ほこりまみれの顔を濡らして男泣きに泣いた。そうして、胸の奥で正造を拝みながら、

「わしらは、田中のとっさまを信じております。お言葉どおりにいたしましょう。」と、五十名の代表を残して、あとの者はおとなしく村々へ帰っていったのである。

落ち着いて穏やか。従順。

身体をおりかがめて礼をする。

女に比べてあまり泣かないはずの男が感極まって泣くこと。

それからというもの、正造は農民たちの信頼に応えようと、昼も夜もなく働いた。議会では今夜食べるものもない農民たちの惨めさを涙ながらに話し、町では鉱毒問題演説会を聞いて、鉱毒地に目を注いでくれるよう人々に訴えた。

鉱毒地を救おうという運動は野火のように広がった。人々は鉱毒地の農民に同情を寄せ、村々を視察したり、お金や衣類などを寄付したりした。

不平や苦痛を人に告げる。

一か所に集める。心を傾ける。

けれども、毒の恐ろしさは実際に被害を受けたものでなくては、本当には分からない。農民たちはその後も東京へ押し出したが、犠牲者を出しただけで終わり、年月とともに世間は鉱毒問題を少しずつ忘れていった。そして、ついには、「足尾銅山の鉱毒問題かね。あれは、田中正造が選挙の票稼ぎを狙って、一人騒いでいるだけさ。」というようにまでなってしまったのである。

あることがらを
目標とする。

正造の心は重かった。一身や党派の利害を離れて、ひたすら正義のために働いているというのに、世間では選挙運動としか思ってくれないのだ。しかも、鉱毒地の農民たちの生活は年ごとに苦しくなり、芋粥も啜れない家や、困り果てた末、家族が散り散りなる家さえも出てきているのである。

「この先、わしはいったい何をしたらよいのだろか。」

…果てる：すっかり…する。
…し終わる。

苦しみのため、額に深いしわが刻まれ、ひげの真っ白に変わった正造には、腕を組んで考え込む日々が続いた。そして一九〇一年（明治三十四年）の秋になって、正造は何事か決心をしたらしく、衆議院に辞表を出して議員を辞めたのである。

正造が何のためにそんなことをしたのかは、その年の十二月十日、第十六議会の開院式の当日明らかになった。

3

その日の午前十一時二十分、開院式に臨んだ明治天皇の馬車が、車輪の音もかろやかに、貴族院議長官舎前の道を左へ曲がったときである。道の両側に居並ぶ人々の間から、黒い木錦羽織袴に足袋跣足の老人が、髪を振り乱し、一通の大きな封書を片手に捧げ持って、＜――陛下にお願いがございます。お願いがございます。＞と叫びながら走り出した。

目上の者へ物を奉る。
献上する。

いかにも軽そうなさま。
軽快なさま。

身分の高い人が、みずからその場に行く。

馬車のわきを守っていた騎兵が、槍を煌めかして老人を遮ろうとしたが、弾みで馬がどうと倒れる。と、ほとんど同時に、その老人――田中正造も足がもつれて前に運び、そこへ警官が二人走り寄って彼を押さえつけてしまったのである。

近づく

邪魔をしてやめさせる。

物が倒れまたは落ちるさま。

正常さを失って自由にならない。

思い切って予定していたとおりに行う。

正造は天皇への直訴を決行したのだった。彼の捧げ持っていた封書は、天皇に宛てた直訴状で、足尾銅山の鉱毒で荒れ果てた村々の有様と農民たちの苦しみが、こまごまと記されていた。

細かいところまで

正造は不敬罪で捕らえられて、監獄につながれるのはもちろんのこと、裁判次第では、死刑にされるかもしれないと覚悟していた。彼は自分が身を捨てることによって政府や社会が鉱毒問題に真剣に取り組むようになればよいと考えて、直訴を決行したのである。

すっかり荒れる。まったく荒廃する。

繋ぐ：束縛する。とらえる。

　それなのに正造は警察にたった一晩とめられただけで、翌日は宿谷へ帰された。彼の身を気づかって集まっていた人々に、正造が苦笑いとともにもらしたのは、＜役人のやつら、この正造を狂人にしてしまいおった＞という一言であった。 心配・懸念する。

　その言葉どおり、政府は正造を不敬罪で裁判にかける代わりに狂人として扱ったのである。狂人が発作を起こして、たまたま天皇の馬車の前へ走り出ただけのことで、まじめに採り上げるようのことではない――政府は人々にそう思わせようとしたのだった。

正造の狙いは、ものの見事に外されてしまったわけだ。けれども、新聞や雑誌がこの事件を書きたてたので、正造の真意は広く伝わり、政府が足尾銅山の鉱害を見過ごしているのはけしからんとする世論が、次第に強くなってきたのである。

あざやか。みごと。

目立つように書く。

見て知っていながら、特に問題にしないで、そのままにする。

そうなると、政府は渡良瀬川と利根川の合流点に近い谷中村を、大きな遊水地にするという計画を発表した。鉱毒の広がるのは渡良瀬川の洪水によってのことだから、大きな遊水地を造って洪水を防げば、鉱毒も広がらないだろうというのだ。そして、政府は、谷中村の村民に金を与えて無理に立ち退かせ、計画どおり遊水地の工事を始めたのである。

今いるその場所をはなれる。立ち去る。

正造は、荒れ果てたの跡に立って、

「政府は間違っている。やるべきことは、谷中村を犠牲にして鉱害の範囲を小さくすることではない。足尾銅山の採鉱を停止させ、鉱害が絶対に起こらぬ設備を造られることだ。」と白い髭を振るわせて怒り続けた。

　それからの正造は、鉱毒を完全に防止できる設備が完成するまで足尾銅山の採鉱を停止させ、滅びた谷中村を元どおりにしようとする運動に、残っている力のすべてを注いだ。

なくなる。滅亡する。

国会議員をやめてしまった正造には、もはや国会で訴える術はない。やむを得ず、正造は、老いて疲れた体を引きずっては、著名な政治家や、知り合いだった議員を一人一人訪ね、鉱毒問題を国会で採り上げてくれるように頼んで回った。昨日は西へ、今日は東へと走り回る正造には、たまたま自分の家の前を通っても、立ち寄っている暇さえなっかた。

むりやり引っ張る。

あちこちを忙しく走って回る。奔走する。

だが、正造がけんめいになければなるほど、政治家たちは彼を避けようとした。彼らは、自分の利益にならない面倒な問題には、関係を持ちたくなかったのである。

それでもなお、正造はあきらめなかった。そして、運動に熱中するあまり、前よりもいっそう身なりの構うゆとりがなくなって、あるときなど、初めて立ち寄った宿屋で、「じいさん、うちでは泊められないよ。」と断られたことさえあったという。

　こうして、二十年間も足尾銅山の購読と戦い、疲れ果てた正造は、一九一三年（大正二年）の八月二日、立ち寄った栃木県吾妻村の農家で急に倒れた。そして、心配して集まってきた人々に、正造は、

「わしの命を気づかう代わりに、みんなが心を一つにして、鉱毒をなくす運動を盛り上げてくれ。この荒れ果てた渡良瀬川の流域に、一本でも多く木を植えてくれ。」と遺言すると、およそ一か月後の九月四日、永遠に瞼を閉じたのである。

　このとき、正造は七十一歳。その名前のとおり正直で、一身の利益や名誉を顧みることなく、正義のため、何者をも恐れず戦いぬいてついに倒れた、壮烈な生涯であった。

最後までやり通す。

　死後に残された正造の持ち物といっては、菅笠と小さな頭陀袋だけで、そのほかには何一つない。翌晩、身寄りの者が集まってその頭陀袋を開けてみると、入っていた物は、聖書一冊と日記が三冊、それに鼻紙が少しだけであった。

気にかける。
心配する。

親族。